

ホセアは自分自身の夫婦関係を、神とイスラエルとの関係になぞらえて捉えながら、夫婦の問題を理解し、民族の不信仰に警鐘をならし、変わらぬ神の愛を伝えました。



ホセア(一部) ラファエロ

ホセアは北イスラエルのヤロブアム王時代の預言者として活躍しました。北イスラエルの流血の歴史を、惨劇の場所の地名をあげつつ、民に信仰に立ち帰るよう、預言しています。けれども、彼の悲劇的な夫婦生活をあからさまに示しながら、神の赦しの御手を知ったことを、苦渋の思いで述べています。この点で、預言者とは「神の言葉を預かる」者であり、「神の言葉に生きる」者として働くのだとつくづく感じさせられます。

ホセアは淫行の女ゴメルを娶るように、神に示されます。夫婦は子ども達を授かりますが、子ども達は淫行によるものであるから、長男はイズレエル、即ち流血と裁きの地、長女は口・ルハマ、即ち憐れまれぬ者、次男は口・アンミ、即ちわが民でない者、と名付けよと神はホセアに言われます。けれどもホセアは子どもを愛さずにはられません。子どもたちが「生ける神の子ら」と言われるようになる幻も見ます。

妻が他の男と性的に関係を持ち、子どもまで産むということは誰が受け入れられるでしょうか。ホセアの苦しみは、神の背信への厳しい告発の言葉の中に、覗くことができます。

告発せよ、お前たちの母を告発せよ。彼女はもはやわたしの妻ではなく／わたしは彼女の夫ではない。彼女の顔から淫行を／乳房の間から姦淫を取り除かせよ。／さもなければ、わたしが衣をはぎ取って裸にし／生まれた日の姿にして、さらしものにする。また、彼女を荒れ野のように／乾いた地のように干上がらせ／彼女を渴きで死なせる。／わたしはその子らを憐れまない。淫行による子らだから。／その母は淫行にふけり／彼らを身ごもった者は恥ずべきことを行った。(ホセア2:4)

ゴメルは「パンと水、羊毛と麻、オリーブ油と飲み物」を求めて愛人たちを追って行き、神を忘れ去ったかのようです。けれどもホセアは、「それゆえ、わたしは彼女をいざなって、荒れ野に導き、この心に語りかけよう」(2:16)という神の救いの御心を再び思い起こすのです。神への思いが失われたからこそ、神が呼びかけ、「私はあなたとまことの契りを結ぶ。あなたは主を知るようになる」(2:22)と、神とイスラエルの真実の契約に立ちかえる日が来ること、また、子どもたちも「わが神よ」と神に立ちかえる日が来る幻を見ます。そして神はゴメルを捜しに行き、愛するようにホセアに命じます。

恋人を追って夫の元を去ったゴメルは奴隷になったのでしょうか、やつれて、破れて、価値がなくなったようです。ホセアは普通の奴隷の半値の銀15シェケル、大麦1.5ホメルで買い戻します。

罪あるゴメルを離縁し、放置するのではなく、追い求め、むしろ犠牲を払っても取り戻し、愛し、共に生きよという御言葉にホセアは従いました。告発の言葉があるように、ゴメルの罪を問いますが、それ以上に、いや、罪があるからこそ、ゴメルを求めるという生き方をします。それは、奴隷であったエジプトの地から、神の民として選ばれ、雲の柱、火の柱で導かれてきた日々をホセアは思い返さずにはいられなかったからです。